

「パッション」★★★★

2013（平成25）年9月4日建賞

<GAGA試写室>

監督・脚本：ブライアン・デ・バルマ

オリジナル脚本：ナタリー・カルテール、アラン・コロノー

クリスティーン（広告会社の重役に上りつめた野心的な女性）／レイチェル・マクアダムス

イザベル・ジェームズ（クリスティーンのアシスタント）／ノオミ・ラパス

ダニ（イザベルのアシスタント）／カロリーネ・ヘルフルト

ダーク（クリスティーンの人愛人）／ポール・アンダーソン

パッハ警部（ベルリン警察の警部）／ライナー・ホック

検事／ベンジャミン・サドラー

イザベルの弁護士／ミヒヤエル・ロチョフ

2012年・フランス、ドイツ映画・101分

配給／ブロードメディア・スタジオ

<同じタイトルだが、あの映画と違いこちらは・・・？>

「パッション」とはイエス・キリストの「受難」のこと。捕らわれ、むち打たれ、十字架を背負い、ついに磔になるまでの「パッション」を生々しく描き、世界に大きな衝撃を与えた話題作『パッション』（04年）（原題は、『THE PASSION OF THE CHRIST』）を監督・脚本・製作したのはメル・ギブソン。そしてモニカ・ベルッチがマグダラのマリアに扮していた（『シネマルーム4』261頁参照）。本作はそれと同じタイトル（原題も同じ）だが、こちらはそんな敬虔な映画ではなく、ブライアン・デ・バルマ監督が『殺しのドレス』（80年）以来久しぶり（33年ぶり）に挑戦したエロティシズム漂うサスペンス・スリラーだ。

1933年生まれの渡辺淳一の最新小説『愛ふたたび』は性的不能になった男を主人公にした問題作だが、1940年生まれのバルマ監督が「何度も繰り返し言っているように、僕は男性より女性を撮影するほうが好きだ」と述べ、「女性の魅力を露出させる撮影方法に、永遠に取り憑かれている」と認めているのは立派なもの。女性に対してこれくらいの意欲があれば、きっとバルマ監督はセックスに関しては今なお現役バリバリ・・・？

<女の敵は女！2人の女主人公は？>

本作の主人公は、若くして世界的な広告代理店コッチ・イメージ社のエグゼクティブにのぼりつめた女性クリスティーン（レイチェル・マクアダムス）と、その部下で今回新作スマートフォン“オムニフォン”の広告をその見事な才能でひねり出した女性イザベル・ジェームズ（ノオミ・ラパス）の2人。ベルリン支社の責任者であるクリスティーンはイザベルのアイデアをそのまま採用するとともに、自分に代わってイザベルをロンドンの会議に出席させて大成功！これ喜んでニューヨーク本社からは、クリスティーンに対して早速「本社に戻らないか？」と打診されたから、こりゃクリスティーンは思惑どおり。しかし、これって部下の成果を上司が横取りしているだけでは・・・？

生存競争の激しい広告業界ではこれくらいのことは当たり前かもしれないが、本作冒頭に散った女同士の火花はその後どんな展開に？クリスティーンは大勢いる愛人の一人と思われるダーク（ポール・アンダーソン）をイザベルのロンドン出張に同行させたから、当然のようにそこではダークとイザベルとの濃厚なベッドシーンが・・・。「その行為」をビデオに撮るというダークの趣味（？）によって、イザベルの興奮と快感はより高まったが、そんなビデオをダークに持たせてイザベルは大丈夫？イエス・キリストの「パッション」も大変だったが、ダークとのエッチと会議での成功に有頂天になっていたイザベルが、今回クリスティーンから受けた「パッション」も大変だ。

<もう少し華が・・・。もう少し色気が・・・。>

サスペンス・スリラーに強烈なエロティシズムが加味された映画として強烈に印象に残ったのは『殺しのドレス』以上に『氷の微笑』（92年）。シャロン・ストーンが取調べにあたる刑事の前で足を組みかえるシーンは、下着をつけているの否かが大論争になった（？）ほどだ。①何を考えているのかわからない大胆な行動、②ミステリアスな魅力、そして何と言っても、③女性としてのセクシーさと美貌。それが「ファム・ファタール」と呼ばれるための不可欠の条件だが、さてクリスティーンは？

そんな基準でクリスティーンを見ると、部下としてイザベルが有能だとわかると女同士でキスを交わしたり、「あなたを愛している」と甘く囁いたりする行動、さらにダークとのセックスにおける仮面や小道具類を見ていると、①と②は十分パスしているが、私の目には③がイマイチ。これがモニカ・ベルッチだったり、スカーレット・ヨハンソンだったら、もっとファム・ファタールぶりが上がるのに・・・。

このように本作ではクリスティーンの魅力がイマイチだったため、本来なら星4つだが、後半に見るクリスティーン死亡後の犯人捜しのストーリーが面白いし、クライマックスに向けての手に汗握るサスペンスが一品品だから、星5つに。

<『タワーの女』ほどのインパクトはないが、それでも>

華やかでセクシーだが、計算高くずる賢い女クリスティーンに対して、イザベルは豊かな才能を持っているにもかかわらず自分ではそれを活かす術を知らず、いつも黒づくめの地味な服を着ている黒髪の女だ。イザベルを演ずるスウェーデン生まれの女優ノオミ・ラパスは『ミレニアム ドラゴン・タワーの女』（09年）で異色のヒロイン、リズベット・サランデル役を演じて一躍有名になったが、あの時のインパクトはすごかった（『シネマルーム24』182頁参照）。それに比べると本作でのインパクトは小さいが、それでもクリスティーンによって徹底的にいじめ抜かれる役柄は彼女によく似合っている。いったんはクリスティーンに横取りされてしまった新作スマートフォンのオリジナル・ビデオを、イザベルの忠実なアシスタントである若い女性ダニ（カロリーネ・ヘルフルト）のアドバイスに従って、動画サイトで公開したことによる反響はすごかったらしい。このイチかバチかの勝負に勝ったイザベルは、クリスティーンを出し抜いてニューヨーク本社への栄転が決定するが、さあここから見せるクリスティーンの見返りは？

クリスティーンのような女から嫉妬を含めた恨みを受けると、怖い。ダークとのベッドシーンを撮影した「あのビデオ」が公開されたら・・・？また、駐車場まで自ら起こした不始末に泣き叫ぶイザベルの姿をとらえた監視カメラの映像が公開されたら・・・？幼い頃に不幸な交通事故で死亡したという双子の姉クラリッサの話をする中で、「愛してる」と言ってほしいとイザベルに語りかけていたクリスティーンが見せる女の性（さが）は、私の想像をはるかに超えた恐いものだ。

そんなイザベルの役を、個性派女優ノオミ・ラパスがさすがと思える演技で演じている。しかし、実はその本領を発揮するのは、自宅で愛人との情事を心待ちにしていたクリスティーンが何者かによって刃物で切りつけられて殺害されるという事件が発生する後半からだ。クリスティーンによってポロポロにされ、薬物中毒のようになっていたイザベルは、ベルリン警察のパッハ警部（ライナー・ホック）と検事（ベンジャミン・サドラー）の追及の前に「自白」してしまったが、こりゃいかにもまずい。イザベルの弁護士（ミヒヤエル・ロチョフ）は「何もしゃべるな」と叫んでいたのに、なぜイザベルはそんなに簡単に自白を？後半からクライマックスに向けてのノオミ・ラパスの演技はかなりの見モノだから、それに注目！

<自白に頼る捜査はダメなのでは・・・？>

本作は女2人が主人公だから、男の存在感は薄い。そう予想したとおり、クリスティーンの人愛人で会社の金を使い込んでいたらしいダークは、クリスティーンに振り回された挙げ句、廃人同様に・・・。そんなダークは、クリスティーンが殺害された当日クリスティーンの家を徘徊していたから、警察はイザベルの自白だけに頼らず、ダークもイザベル殺害の有力な容疑者として取り調べる必要があったのでは・・・？頭やセンスはいいのだろうが、あまり色気は感じられないイザベルの取調べシーンに、『氷の微笑』のようなエロティック・シーンを期待できないのは仕方ないが、本作に見る弁護士同席の上でのイザベルに対するパッハ警部と検事による取調べ風景は結構面白い。そこでは、取調べ側は盛んにイザベルの自白を求め、弁護士は「しゃべる必要はない」と阻止しようとするのだが、前述のように薬物のせいイザベルは意識朦朧状態のまま自白を・・・？

取調べ段階で「自白」していた被告人が、法廷では一転してそれを覆すケースは時々ある。直近で有名なものは、中国の微博（ウェイボー）で公開されるという異例の展開となった薄熙来（ポーシーライ）裁判だが、自白プラスαの補強証拠によって一度は刑務所に収監されたイザベルが自白を撤回し、急に理路整然と無罪の論拠を主張し始めると・・・。「何人も自白のみで有罪とされない」ことは憲法と刑事訴訟法の大原則だが、さて本作は？

イザベルが自白を撤回した後にパッハ警部たちが再捜査してみると、犯行当日イザベルはバレエ「牧神の午後」を鑑賞していたことが劇場員の証言で確認されたり、血のついたスカーフがダークの車の中で発見されたりしたから、こりゃヤバイ。こうなると、それまで何の活躍の場面もなかったイザベルの弁護士も俄然やる気を出して攻勢に転じたから、結果として警察と検察は大黒星を喫することに。心神喪失の場合は無罪、心神耗弱の場合は刑罰が軽減されるのは刑法の大原則だから、取り調べている被疑者がそれに該当しないかどうかを十分チェックすることはもちろん大切だ。しかし、それ以前にイザベルのように薬物のせい意識朦朧としている被疑者の供述を、まともな自白として取りあげてはならないことは捜査のイロハなのでは・・・。

<クライマックスに向けて、第三の女が急浮上！>

後半からクライマックスに向けて気になるのは、イザベルの忠実なアシスタントだったはずのダニの動き。イザベルが大量の睡眠薬を飲んで意識朦朧となっているのをダニは盛んに心配していたが、なぜ「試し」のようにダニがクリスティーンに睡眠薬を飲むシーンが登場する？本作冒頭でニューヨークの本社から絶賛を浴びた新作スマートフォンの広告は、イザベルのアイデアにもとづきイザベルとダニが共同作業で制作したのだから、その手柄をクリスティーンに横取りされてしまったことにダニが強い不満を抱いたのは当然。したがって、その後のクリスティーンとイザベルの女同士の権力闘争（？）について、ダニが陰に陽にイザベルの味方をしたのは当然。しかし、イザベルがクリスティーンによって痛めつけられ、腕抜け状態になってしまうとダニとしても打つ手なしだった。そんな状況下で突如クリスティーンが何者かによって殺害されたのだから、このダニも容疑者の一人にされても仕方ないところだが、警察の目下のターゲットはイザベルただ一人だ。その取調べの様子を見ていると、ダニだって「犯人はきっとイザベルに違いない」と思ったはずだが、結果は二転三転の挙げ句、晴れてイザベルは自由の身に。これにはダニも大喜びで、安モノのお花を持ってパッハ警部が謝罪に訪れることを笑い話のネタにしていたが、そこではじめて見せたダニの本音とは？

ああ、やっぱり女は怖い。それまで忠実なイザベルのアシスタントとして十分な役割を果たしてきたダニが、クリスティーンとイザベルが女同士でキスをしている風景を見て、こんな風に考えていたとは・・・。そりゃ、ダニだって人並みの性的欲望を持った若い女なんだから、そこに何らかの性癖があってもおかしくはないが、まさかダニにこんな性癖が・・・。バルマ監督自らが書いた本作の脚本は、クライマックスに向けての展開がスピーディーであるとともに意外性が強い。さあ、クライマックスに向けて急浮上してきた「第三の女」ダニは一体どんな役割を果たすのだろうか？そして、そこから明らかになってくるクリスティーン殺害の真犯人とは・・・？

<双子の姉クラリッサは存在するの？それとも・・・？>

女は平気で嘘をつく動物。したがって、ベッド上で見せるクリスティーン「ある性癖」を含めてクリスティーンのことをよく知っている男ダークは、クリスティーンに双子の姉などいないことをよく知っていた。したがって、クリスティーンから聞かされたそんな話をイザベルが真に受けて「クリスティーンはかわいそうな境遇に育ったため、今でも人から愛されたいのだ」と語っている姿を見て、「あの女は平気で嘘をつく女だ」と一笑に付したのは当然。そして、それを聞かされたイザベルは、あらためてクリスティーンの人を欺すテクニクの巧みに驚いたはずだ。ところが、クリスティーンのお葬式に出席したイザベルもダニもそしてダークも、目の前に立っているサングラスをかけ、高いヒールを履いたハデな女を見ると、こりゃ死んだはずのクリスティーン！いやそうではなく、この女こそクリスティーンが語っていた、死んだはずの双子の姉・・・？すると、クリスティーンの話はやっぱり本当だったの？

バルマ監督が描く本作のクライマックスは、クリスティーン殺害シーンを「牧神の午後」のバレエシーンと二分割して見せるという大胆な試みと同じように、斬新であっと驚くものになっている。スクリーンを二分割する手法には賛否両論があり、私はあまり好きではないが、クライマックスにおける双子の姉の登場（？）という意外性はインパクトが強い。もっとも、クライマックスに向けては、クリスティーン殺害の真犯人は誰か？というテーマでストーリーが二転三転するが、それに続く更なるクライマックスでは、真犯人が明らかになった後に更にストーリーが四転五転していくので、それに注目！そして「ええー」と驚く間もなくスクリーンが真っ暗になるので、後はあなたの頭の中でゆっくりストーリーの整理を・・・。私は、こんな面白い映画、大好き！1940年生まれとは思えない、バルマ監督の手腕に脱帽！